

## 記憶されるインドネシア

### —1945-70年の日本小説に描かれる戦時占領—

太田 淳<sup>†</sup>

Indonesia in Memory:

The Wartime Occupation in Japanese Novels, 1945-1970

Atsushi Ota

This paper aims to examine how Japanese have remembered and described the Japanese occupation of Indonesia during the World War II in novels and other publications. I attempt to analyze the postwar understandings of Japanese about Indonesian and Japanese peoples and societies, and their relationships in Japanese-occupied Indonesia.

The memoirs of former military personnel, which have constituted the majority of postwar Japanese publications on wartime Indonesia, created several stereotypes of the Japanese-Indonesian relationship. One such image is Japanese as “merciful giver” and Indonesians as “thankful receiver”; while another is the dichotomy within the Japanese community between “incompetent, ignorant top military” figures vs. “kind, disinterested lower soldiers and ordinary people.” A third stereotype is the “egalitarian” Japanese soldiers, who maintained very cordial contact with Indonesians.

Among civilian writers, Fukuma Kenzo presented a nearly equal relationship between Japanese and Indonesians based on mutual respect, described very independent Indonesian ladies proud of their vocations, and depicted the madness and atrocities committed by some Indonesian groups immediately after the end of the war. A second writer, Hayashi Fusao is critical about both the Japanese military rule and the aforementioned stereotypes. On the other hand, the female writer Yamada Mitsuko clearly distinguishes between “good and bad” Japanese, and begs for exoneration of powerless female “victims.” Some of the images and messages in these works have been forgotten, while others still represent the images shared by many Japanese about how relations between Japanese and Indonesians should have been.

#### はじめに

本稿が試みるのは、第二次世界大戦期における日本のインドネシア占領を、日本人が戦後いかに回想し叙述したかについて、幾つかの小説と出版物を通じて考察することである。戦争および占領地に関する記憶については世界のさまざまな地域において研究が進められているが<sup>1</sup>、インドネシアに関してはまだそれほど関心が向けられていない<sup>2</sup>。しかし他地域における研究が明らかにしているように、過去の占領に関する記憶は、当該地域に対する現代の我々の認識や関係構築を大きく規定する重要な要素である。

文学作品を通じて占領地または植民地に対する人々の認識を議論するという方法に関して、筆者は

---

<sup>†</sup> 広島大学大学院文学研究科准教授

E. W. サイドの『文化と帝国主義』から強く触発されている<sup>3</sup>。多くの文学研究者が占領地または植民地を描く作品を植民地文学という文学史の一ジャンルとして扱うのに対し<sup>4</sup>、本稿はサイドに従って、占領地の社会や被支配者、およびそれらと支配者との関係に関する人々の認識や理解を考察対象とする。そのためにはインドネシア文学における日本認識についての考察も不可欠であるが、この点は今後の課題としたい<sup>5</sup>。

小説を主に取り上げるのは、これが近代国家形成ともしばしば結びつけられる、近代を代表する文学表現形式であるからである。ペネディクト・アンダーソンが詳論したように、小説と国民形成は密接に関連している<sup>6</sup>。国民形成期でない時代を扱う本稿が取り上げる作品はナショナルな空間を新たに構築するのではないが、小説というジャンルは物語の「場」を創造する機能を持つことから、それらがインドネシア人社会や日本人社会を含む日本占領期インドネシアという場を読者に提供し意識させた働きは大きい。また、作家は物語の場を創造し読者に理解させるだけでなく、読者という共同体が物語の場をどのように認識・理解しているか（し得るか）を感性的に掬い取って表現するため、小説を通じて当時の読者のインドネシア認識を窺うことが可能となろう。

植民地文学が占領当時の作家の創作や思想を主に問題とするのに対し、本稿は戦後に書かれた作品を取り上げ、作家が回想の中で再構築したインドネシア人とその社会、在インドネシア日本人とその社会、そしてそれらの相互接触の描かれ方を検討する。これらはもちろん事実である必要はなく、むしろ相当の弁明や正当化を含む「そうありたかった」像や「そうあってほしかった」像である。記憶とは常にそういった再構築あるいは忘却を含むことを踏まえた上で、本稿は戦後日本人によって事後的に構築された自己像およびインドネシア人像を分析する。

サイドや植民地文学研究者と異なり、本稿は文学的評価の高い著名な作家を対象に選出することをしていない。いわゆる「徴用作家」たちは敗戦後に自らの「南洋行」を回想し作品にすることがあまりなかったため、ここでは彼らの作品を取り上げない。代わりに本稿はできる限り多様な作品を取り扱うことによって日本人によるインドネシア認識・理解の多様性を示しつつ、それらに通底する問題を探る。自伝や回想録を含めば、占領期インドネシアに関する著作は、元軍関係者によるものが大半である<sup>7</sup>。しかしそれらはインドネシアの現地人社会や民間日本人についてあまり情報を含まず、また軍関係者は必ずしも当時の日本人の認識や理解を代表しない。そこで本稿ではまず軍関係者の作ったインドネシア人-日本人関係に関するステレオタイプを議論し、次いで小説を通じ民間人の認識や理解を分析することにする。小説には、今まであまり取り上げられることのなかった作品、すなわちジャーナリスト福馬謙三の『黒い情熱』（1948）、作家林房雄の『水中の城』（1949）、および（半）職業作家山田光子の『セレベスの挽歌：銃と女の記憶』（1961）を取り上げ<sup>8</sup>、女性および非職業作家を含む非軍関係者の認識・理解を検討する。これらの作品は出版件数からすると少数派に属するが、軍関係者と職業作家の作品のみを取り扱うよりも、実際に占領期インドネシアに存在した日本人の多様なバックグラウンドをよりよく代表すると思われる。また軍関係者の著作はインドネシア人であれ日本人であれ女性を描くことがほとんどないが、本稿は女性作家を含む民間人の著作に注目することによって、彼らのジェンダー認識も検討する。

本稿が扱う1945-70年という時代は、占領期インドネシアを回想する戦後文学作品の主要なタイプが一通り現れる時期にあたる。筆者は他稿で、1945年から2005年頃までの日本の大衆メディア

(小説、回想録、映画など)に現れた占領期インドネシアに関する記憶の変遷について論じた。その中で筆者は、占領期インドネシアを回想する際に頻繁に用いられるステレオタイプやイメージは1970年頃までにはほぼ出尽くし、それ以降は既出のものが繰り返されたと指摘した<sup>9</sup>。本稿は1945-70年の作品を集中的に検討することにより、その時代の日本人の占領期インドネシアに対する認識をより深く掘り下げることを試みる。

## 1. 人間味あふれる日本人：元軍関係者の回想

元軍関係者の自伝や回想録は、厳しい検閲を行った連合軍による占領が終了した1952年以降、大量に出版されるようになる。これらはいくつかのタイプに分類することが出来る。

最も早く1940年代から現れたのが、下級将官や兵士による回想録である。これらは軍隊生活を描く部分が非常に少なく、敗戦後の収容所生活における辛酸を中心に描く点に特徴がある。著者にはジャワなど戦闘が少なかった地域に進駐した者が多く、ニューギニアなど激しい戦闘が行われた地域での経験の回想録は、1970年代以降に多く出版された。

1950年代には一般に「戦記物」と呼ばれる、元兵士たちの戦闘経験の出版がブームとなった。それらはスリリングな戦闘シーンを活写する一方、戦争全体のプロセス、現地の人々、占領行政などにはほとんど言及しない。

中高級将官による回想録は1960年代に多く出版された。例えば占領当初のジャワ軍政における責任者であった軍司令官今村均は、回想録の一冊で彼のジャワ行政を回顧している。今村は、行政への過剰な介入や戦争準備の不足などに関して彼自身を含む軍上層部を批判する一方、彼が大本営からの命令に反してジャワで寛容な統治を行ったことを強調している。ほとんどの場合ジャワ人はそれを感謝し彼を慕う人々として描かれる<sup>10</sup>。つまりここには「慈悲深き供与者と感謝溢れる受領者」という非対称な日本人-インドネシア人関係が強調されている。この関係は他の軍関係者にも民間人の著作にも繰り返し現れる、強力なステレオタイプとなる。

茨木誠一の『メラティの花のごとく』(1953)は、敗戦後インドネシア独立戦争に参加した元日本兵による最初の回想録である<sup>11</sup>。特務機関の長官として現地人協力者である特務機関員(インド人、中国人、インドネシア人など)を率いてシンガポールやスマトラなどで諜報謀略宣伝活動を行った茨木は、敗戦後インドネシア人部下の訴えを受けて独立戦争に参加する。彼は部下ナジャムディンの説得を受けて戦闘参加を決意する場面を、次のように描いている。

「私達は機関長を信じています。あなたは私達の先生であり指導者です。私達が教育されている時、先生は“インドネシア独立まで私は諸君と共に進む”と行って下さったじゃありませんか。(中略)先生はきっと深遠な計画をもって今に命令して下さるものだと一同待機している(中略)。先生、早く私達を帰らせて独立運動に参加させて下さい。そして先生もいっしょにきて私達を導いて下さい」

ナジャムディン君は熱涙を流して、とつとつと懇請した。純情であり、熱血漢であり、至誠の青年であり、祖国愛にもゆるナジャムディン君のこの言葉は、深く私の肺腑をえぐった。(8-9頁)

茨木は彼の部下達の「先生であり指導者」で、ナジャムディンは彼の「深遠な計画」,「命令」そして導きを待っている。ナジャムディンの独立への熱い思いが強調されている一方で、茨木との関係はナショナルスティックかつ軍隊調に現れた「慈悲深き供与者と感謝溢れる受領者」のステレオタイプである。インドネシア独立戦争の中で元日本兵と無関係に行われた戦闘は、実際には圧倒的多数であったにも関わらず、日本で一般向けの著作の中で書かれることはほとんどない。一方、元日本兵の独立戦争参加を描く作品は多く、読者に日本の「貢献」の側面が記憶された。

日本の南方進出や軍政全般を解説する一般向け著作は1940年代から見られた。連合軍占領期の作品がジャーナリストによって軍部に対し非常に批判的な姿勢で書かれたのに対し、1950年代の作品は元軍関係者によって、軍政を半ば正当化し半ば批判する態度で書かれている点が特徴的である。元軍関係者による著作にはいくつかの興味深いステレオタイプが現れる。

まず一つめのステレオタイプは、軍政上層部の無能・無理解と一般日本人の親切無私とが対照的に描かれることである。例えば田中政男と越野菊雄は、それぞれ多くの挿話や経験を交えて日本軍政期を中心とするインドネシアの歴史を書いたが<sup>12</sup>、ここにこのステレオタイプは次のように描かれる。

軍政の失敗は、何といてもインドネシアに対する認識がまったく欠如していたことと思いがた日本軍官民の征服者の根性どであった。たとえば、無能な古手軍人や官吏や政治家などが、司政官として多数送り込まれてきたが、彼らはインドネシアを理解しようともせず、いたづらに傲慢にかまえて、いたるところで劣悪ぶりを暴露した。(田中 64 頁；一部改行略、以下同)

[バリ島・ムングイに敗戦後に設置された日本人収容所に] 自宅や会社で使っていたインドネシア [人] たちが、いれかわりたちかわり毎日キャンプへ訪ねてきた。(中略) シンガラジャで民政部直属の日本人理髪師が使っていた弟子のインドネシア青年は、やはり途中で一晩野宿して旧主人を訪ねてきた。その夜は旧主人の傍で雑魚寝をし、翌日一日中旧主人と一緒に日本人の頭を刈ったうえ夕方帰っていった。(中略) この青年には鏡、バリカン、ハサミなど道具ひとそろいを与え、あとあと独り立ちしてやっていけるようになってきた (中略)。その青年を喜びむかえて、一緒に雑魚寝するというのも「皮膚の色」の同じ日本人でなければできぬ芸当であろう。(越野 200 頁；「」は原著者による、以下同)

司政官の「無能」と「インドネシアを理解しようとしぬ態度のために軍政は「失敗」したとする田中の論理には、インドネシア支配という試み自体は賞賛に値するものであり、また司政官を除く中下士官や民間日本人の活動はインドネシアにとっても有意義なものであったとの主張が込められている。越野は、民間日本人にはインドネシア青年に「道具ひとそろいを与え」る者がいたことを紹介し、その親切を強調する。そして雑魚寝を苦にせずやって来たのはインドネシア青年であるにも関わらず、親切無私は「喜びむかえ」た人々の側にあり、さらにそれが同じ「皮膚の色」を持つ日本人全体の特質と解釈される。今村の回想録にもその傾向が見られたが、軍上層部に対する批判は、それ以外の日本人を賞賛する主張と表裏一体である。

もう一つのステレオタイプは日本人の「平等主義」である。現地住民への宣伝宣撫・民心獲得を目

的に編成された南方作戦軍ジャワ宣伝班を率いた町田敬二は、インドネシア人と日本人の接触を次のように説明した<sup>13</sup>。

彼ら〔インドネシア人〕は日本人との接触で、大いに独立の尊さも知ったし、たぶん人間的成長を急進した。それは軍という法人格の政策とは離れて、日本人の一人一人が持っている人間味が、彼らの人間性に作用したからである。(中略) 三百年もの間、神さまに隣り合わせて君臨していたオランダ人—白人—に対する畏敬の念は、日本人には皆無だった。従来 of 支配者は、現地住民とは厳格な一線を画して、特別な人種として生活していたが、日本人はそうでなかった。この新しい支配者たちは現地人たちと肩を組んで歩き、同じ室内で、同じ食事をし、同じ高さに座った。(144-145頁)

インドネシア人と「肩を組んで歩き、同じ室内で、同じ食事をし、同じ高さに座る」日本人は、この平等主義において異人種であるオランダ人と異なると強調される。インドネシア人の「人間的成長」までもが、「日本人との接触」の成果とされる。越野と同様に町田も、インドネシア人との人種的異同が日本人とオランダ人が取った行動の違いを説明すると考えている。一方で、このような日本人の平等主義と恩恵の主張を、インドネシア人がどう受け取っていたのかについては、全く想像が及んでいない。この平等主義は、まったく日本人の理解のみで構築された日本人—インドネシア人関係の像である。このような日本人の「人間味」あふれる平等主義、および「無能・無理解な軍上層部—親切無私な一般日本人（及び中下士官）」の対比というステレオタイプは、後年の他の著者の作品にも繰り返し現れる。

## 2. 被支配者への接近：福馬謙三『黒い情熱』

1948年に出版された『黒い情熱』は、日本占領期のインドネシアを舞台とする戦後初の日本小説である。作者の福馬は主人公と同様ジャカルタに派遣された新聞記者であり、作品には作者の実体験が強く反映されている。同時代の多くの回想録が戦争直後の収容所という閉ざされた日本人社会の中の出来事を主に書き記しているのと異なり、この小説はインドネシア人と毎日接触する民間日本人の戦争中における日常生活を具体的に描く。三十代後半の主人公飯沼三平は、バタヴィア（現ジャカルタ）に赴任し現地人向け在地新聞を指導・統括する新聞会事務局に勤める。彼は偶然知り合ったインドネシア人少女スナンが経済的理由で高校をやめようとしているのを知り、学費を援助する。二人は定期的に会うようになるが、敗戦とともに三平はバタヴィア近郊の収容所に入る。

この小説ほど、自立して自信に満ちた一般インドネシア人を描いた作品は他にない。三平に雇われたマレー語教師スパルタはインドネシアの農産物や歴史について三平に堂々と講義し、その知識で彼を感心させる。スナンは「少しも卑下したり、逡巡したりするような態度は見せず、明るく笑いながら三平から金の入った封筒を受け取る」。ボゴール植物園を一緒に見学する際は「案内人より私はよく説明できます」と胸を張り、実際三平は「植物学に対する彼女の知識に、新たな尊敬を感じる」。(20-27, 31-35頁。旧漢字・旧仮名づかいを現在のものに改め、ルビを省略。以下同)。彼等は対等とは言えないまでも、互いに尊敬と親愛の情を育てている。

福馬はインドネシア人でも特に女性の職業的自立と仕事に対する誇りを強調している。敗戦後三平が人々と別れを告げる時、彼が新規採用し指導した若い女性記者であるシリイと、これから女優を目指そうとするスナンは、三平とそれぞれ次のような言葉を交わす。

「私もシリイという一人の女性が、新聞記者として将来活躍することを祈る」

「将来ではありません。既に現在私は活躍して居ります。家庭向きの仕事は私が専門にやっているのですもの」昂然として彼女は自信に満ちていうのである。(10頁。一部改行を略。以下同)

「立派な女優になることに努力します、女優は私には自信がありますの、(中略)ジャワは元来芝居といえば象徴劇ばかりだったのです。新劇が誕生してまだいくらか経っていません。私達の第一劇団はその意味で処女地の開拓とも言えるのです。」(146-147頁)

自序によればスナンは実在の人物で実際にその後女優として活躍したし、シリイも恐らく福馬が実際に接したインドネシア人女性記者を反映しているであろう。従ってこれらの女性が与える印象は、福馬自身が実体験の中で感じ取っていたものと考えられる。福馬は彼女たちの態度に少しも批判的でなく、時折呆然としながらも彼女たちの強さと自立心に感心し、好意的である。もう一つ特徴的なのは、福馬がスナンやシリイに職業への「自信」や、「処女地の開拓」となる仕事の意義について語る時、彼女たちを日本人女性と比べたり、インドネシア人女性をステレオタイプで説明したりしないことである。この小説には、女性の態度を人種ごとに区分したり読者に教訓的・啓蒙的であろうとしたりする傾向はあまりない。この点は、元軍関係者の著作が人種の異同を強調したり読者に教訓を述べたりする傾向が強いのと対照的である。福馬はむしろごく自然に彼の接触したインドネシア人女性たちの自立と自信、職業観に感心している。ここには、そのようにして構築された、彼の人種を越えたジェンダー認識が表現されている。

インドネシア在住日本人についてはその悪行ぶりを強調する点でも、この小説は元軍関係者による無数の回想録と大きく異なる。福馬は、憲兵ばかりでなくそれ以外の者(民間人も含む)もインドネシア人に強圧的・暴力的に臨んでいると述べる。次の引用の一つ目は三平の、二つ目は収容所で知り合った元バタヴィア医科大学教授・宮木による日本人社会の観察である。

[バタヴィア] 全市のいたる所に真昼間から[日本人の] 酔払いの姿が見られた。それらのある者は罪もない原住民を殴って自ら快とした。日本人が近づくと大抵の原住民は逃げるのだ。或る者はベチャ(自転車風になった人力車)の只乗りをして得意になった。(51頁)

「ジャワにいる日本人はどれもこれも酒をくらって酔払って、インドネシア[人]を殴ったりなどばかりいる」(84頁)

「日本人が近づくと大抵の原住民は逃げる」ような恐怖が満ちた社会は、元軍関係者の回想録には

決して現れないものである。ところが、福馬が一般化しているこのようなインドネシア人-日本人関係と比べると、三平と親しく接したインドネシア人たちの、彼に対する深い情愛と感謝の念は極めて対照的である。彼のもとで働いたシリイと、自宅で住えたジョンゴス（下男）は、日本敗戦の報せを聞いて三平にそれぞれ次のように語る。

「トアン [引用者注：雇用者などに対する敬称] の指導によって私は新聞記者になることが出来ました。トアンは私達にとっても親切です。みんな感謝しています。私はトアンと別れても、いつまでも貴方の行為を心の片隅で思い出すでしょう」(10 頁)

ジョンゴスは突然「クックッ」とすすり泣きを初め早口に何事か訴える。(中略)「……トアンのようないい人がここを去ってしまったら私はどうして今後を生きていこう。トアンとはキラキラ(約)一年半しか一緒にいなかったが私にとってはもっとも楽しい一年半だった」(13 頁)

このようにインドネシア人女性部下およびその同僚たちは三平の「指導」と「親切」に感謝し、ジョンゴスは別れを惜しんで泣き、今後の人生に当惑している。このような一部のインドネシア人の態度と、先述のようなインドネシア人一般が日本人に対し抱いていた恐怖が同時に存在したことは、一見矛盾するようにも思える。この点についてスナンは、医大教授で憲兵隊の暴力を受けた経験を持つ父親の言葉を通して、その理由を語っている。

それにも拘わらず、父は日本に対して深い同情と理解を持っていました。日本を誤っているのは日本の政治家と軍人だ。日本人の大部分はいい人なのだけれども、日本の軍隊となると、殊に憲兵隊となると、どうしてあんなにも、無鉄砲で乱暴なのだろうと言って居りました。父は父を殴った日本の軍人を今でも深く憎んでいます。私も憎んでいます。しかし(中略)私は父と同じように、日本人は好きなのです。(49 頁)

ここでは「日本人の大部分はいい人」で、軍人、特に憲兵隊だけが「無鉄砲で乱暴」だとされている。インドネシア人に暴力を振るう日本人が珍しくなかったことを先に述べながら、大多数の一般日本人は「いい人」で憲兵隊をはじめとする軍人だけが例外的に暴力的・抑圧的であるというインドネシア人による認識を、福馬は敢えて論評しようとしな。福馬はどちらかの認識がより正しいとするような態度を取らず、異なる観察者による認識の差異をそのまま受け入れている。三平はインドネシア人を経済的・技術的に支援・指導し、彼等はそれを感謝して受け取る。スナンの場合は彼への感謝が日本人全体に対する愛情にまで発展している。ここに「慈悲深き供与者と感謝溢れる受領者」のステレオタイプの早い出現を指摘することも可能である。しかし福馬の筆致は軍関係者のそれとは異なり、インドネシア人の言葉で彼らの認識を語らせ、それをできる限りそのまま理解しようとする態度が特徴的である。

さらにこの小説の興味深いところは、作者がインドネシア人による日本人に対する暴力・残虐行為についても冷静に記述しようとしている点である。敗戦直後のある朝三平は、クリス(短刀)と竹槍

で武装した40人ほどのインドネシア人の一団がトラックに乗ってやって来るのを目撃する。それは、新聞会近くの日系被服工場の現地従業員たちが、数日前から日本人責任者に主権委譲を迫ったが拒否され、無理矢理工場を乗っ取るために外部から武装集団を招いたところであった。彼等はやがて工場を襲撃し、工場に居合わせた日本人のうち数人は屋根に登って逃げたが、逃げ遅れた二人が新聞会の前に走ってきた。その二人をインドネシア人集団が殺害するのを、三平は建物の中から目撃した。

躍りかかったインドネシア〔人〕が背後から竹槍で突いた。(中略)他の一人はノールドウェーク街を右に曲がろうとした所に、インドネシアの集団があり、その中の一人がクリスを抜いて横合から首に切りつけた。(中略)二人の生命を奪ったインドネシアはその死骸を囲んで「ムルディカ(独立)、ムルディカ」と二度ばかり喚声をあげた。それらの顔は全くさくりやくをこととした彼等の先祖の血をそのままに沸き立たせた土人の表情である。痩せた顔に残忍な笑を浮べ何事が頻りにわめいている。赤道に近い太陽がギラギラと照る街路に、てんでに竹槍を持った集団を見ると三平は、暑い日であったが、背筋に走る冷汗を感じた。彼等インドネシアに竹槍術を教えたのも日本軍の仕業である。彼等の竹槍の操い方は手に入ったものだった。日本軍の教えた通りにやった、三平は硝子に頬をつけたまま動けなかった。血に狂った彼等は今に新聞会に飛び込んで来るかも知れない、早く安全な所へ逃げなければならぬ、と思いながら、動けなかった。(中略)

〔やや時間が経ってから〕疲れてキリキリする頭を卓子にのせて三平は今の惨劇を考える。(中略)従順そのもののように考えていたジャワの青年に、あの残忍性はどこからよびさまされたのであろう。すべてインドネシアの独立運動が彼等の血を呼んだのである。(58-61頁)

「残忍な笑を浮べ」、「死骸を囲んで」「喚声をあげ」るインドネシア人を前にして、三平は身動きすら出来ない。日本人は一般にジャワ人を「従順そのもの」というステレオタイプで認識しており、それゆえ彼等のこのような集団狂気と残忍さにショックを受けたのだが、三平自身は多くのインドネシア人と個人的に親しく接し概ね好印象を抱いてきただけに、衝撃の大きさも一般の日本人以上であったことであろう。福馬は自序で、彼はこの事件を実際に間近に目撃したと述べており、ここで述べられる衝撃と頭が「キリキリする」疲弊は、彼自身のものである。福馬はまず見たままの光景を描き、次いでその行為を分析する。彼はインドネシア人の残忍性をまず「彼等の先祖の血」に求め、最後の部分では「インドネシアの独立運動が彼等の血を呼んだ」と結論づける。できる限り多くの要因から、信じがたい光景の説明を得たいとの心理が見て取れる。上の引用箇所が章の最終部分に置かれていることから、福馬はこの最後の文章を章の結論とし、彼の見解として示していると見なすことが出来る。独立運動がどのようにジャワ人の遺伝的性質を喚起したのか、彼の分析は十分でない。しかし彼が、インドネシア人を理解不能として拒否しているのではないことは明らかである。サイドがたびたび指摘しているような、支配者の立場にいる作家が被支配者を彼等の理解の外に追いやるような表現とは、福馬の筆致は明らかに異質である<sup>14</sup>。福馬は何とか理解を試み、被支配者に接近しようとしている。インドネシア人の残虐行為に、日本の軍事訓練の成果があることも彼は見て取る。福馬の分析は十分深まらないが、頭が「キリキリする」彼の疲弊は、苦しみながらもインドネシア人に接近し理解しようと努める姿勢を示している。

### 3. 支配者を突き放す：林房雄『水中の城』

林房雄の『水中の城』(1949)は、その後の作家たちに類似のタイプが現れない、異色の作品である。林は1936年に「プロレタリア作家廃業」を宣言して左翼から転向し、日中戦争に従軍した経験を持つ。林はさらに1963年に『大東亜戦争肯定論』を発表し、戦前日本の拡張主義を賛美したことで知られる。それだけに、抗日運動を画策するインドネシア人の活動や心理を精緻かつ好意的に描き、当時の日本人を冷めた突き放した視点から描く本作品は、文学史のみならず林の創作活動においても異色である。

物語は、映画監督である主人公の「私」—四十代のやや厭世的なインテリ—が、ジャワで過ごした数週間の経験を中心とする。「私」は軍の宣伝映画の撮影を命じられシンガポールに赴いたが、戦局の悪化のため製作出来ず、助手とともにジャワへ気分転換の旅行に出かける。二人はバタヴィアからジョグジャカルタに向かう列車の中で偶然に、日本人の「狂人」青年と、憲兵に捕らえられた若いジャワ人の男と出会う。「私」はジョグジャカルタで「狂人」(この時までには名家の出身である高梨と判明)と再会し、王宮への招待を受ける。実際に案内された場は王宮でなく売春街であったが、そこで先のジャワ人と再会し、彼がジョグジャカルタの王子であり、また抗日運動のリーダーで仲間にスドップ・マラムと呼ばれていること、高梨は彼の親友であることを知る。

「私」は車中で高梨とスドップ・マラムに出会った後、「狂人」高梨の背景を次のように想像する。

あの青年紳士が何者であるかは、私は知らぬ。だが、戦争によって半ば強制的に遠く熱帯の瘴気の中に送り出された日本人の心理の一面を鋭く象徴していることは確かだ。戦地では軍人も軍属も商社の民間人も例外なしに一種の狂気に冒されている。この狂気を緩和し、事実上の発狂からのがれるために、人々は必要以上の厳格主義、嗜虐的行動、飲酒、放蕩、好色、無為等の中に逃避している。最も無害な逃避が『熱帯呆け』と自称する怠惰であり、最も悲惨な逃避が極度の神経衰弱による発狂かもしれぬ。(中略)熱帯の高温度と閉鎖的な社会制度の生む犠牲者である。(75頁)

「狂気」と「怠惰」に支配される在インドネシア日本人社会の描写は気怠く陰鬱で、戦前期からの一連の「南方物」文学作品の中でも例外的である。「南方物」を著した作家の多くは、インドネシアに「楽園」を見た。阿部知二にせよ金子光晴にせよ、内地での生活に息詰まりを覚え、「楽園」への逃避と自らの「再生」を試みただけに、彼らの第一印象ではことさら熱帯の「楽園」性が強調された<sup>15</sup>。この小説の主人公達のインドネシア訪問の動機も、映画制作が出来ない鬱屈を晴らすという点で「南方作家」たちに類似していた。それゆえ「私」は「ジャワ島の空気の透明と柔軟と甘美な伝奇性」を「バタヴィアとその周辺で一週間ほど暮らしただけで、十分に予感し得た」のであった(65, 67頁)。当初こうした甘美な熱帯の夢に浸っていた「私」は、憲兵のむき出しの暴力によって高貴で知的な高梨とスドップ・マラムが捕らえられ、その末に二人が逃亡するという強烈な体験を経ると、一気に現実を直視するようになる。「私」は、当時の日本人社会の日常に、破滅をはらむ倦怠と狂気が満ちているのを見て取った。狂気を生む「閉鎖的な社会制度」が軍政に起因することは、物語の中で次第に明らかにされていく。

林は日本軍政の評価を、スドップ・マラムと「私」に、対話の形で述べさせている。

「私は現在の戦争に於ける日本人の動機及び行動を決して肯定いたしません。しかし、若干の日本人が抱いている善意と理想をまで否定するものではありません。(中略) 日本軍は彼等の力によって、インドネシアは解放されたと誇称しておりますが、私は……我々インドネシア人はそれを信ずることができません。日本軍のジャワ占領は単なる征服であって、決して解放ではないのです。……少数で例外的な日本人は善意を以て、我々に対しようとしています。だが、彼等の善意と征服と虐政の事実を変更することは出来ません。(中略)」

彼の英語によるたどたどしい表現が私の中に捲き起こしたものは、深い羞恥心と激しい怒りであった。羞恥心は私の半ば無意識的な行動 [引用者注:「私」がジョグジャカルタに向かう車中でスドップ・マラムに水を与えた行為を指す] をジャワ人に対する善意と愛情の表れだと過当に賞賛されたことと、私もうすうす感附いていた日本軍の蛮行を、指摘されたことによって生じたものである。激しい怒りの方は、自分でも解釈しかねた。それは私の血の中の盲目的な愛国心の爆発であったかもしれぬ。日本及び日本人を公然と攻撃する敵と一種の交渉または取引を行おうとしている自分に対する怒りであったかも知れぬ。(中略)

「私は戦っている日本人の一人です。私はあなたによって感謝されるような行動は何一つしていないと信じます。もし、日本の敵に利益と援助を与えたと知ったら、高梨君のように狂気するよりほかはないでしょう。」(152-154頁)

一部の日本人の善意を認めつつも、スドップ・マラムは日本支配が「征服と虐政」にすぎないことを指摘する。「私」は「愛国心の爆発」を覚えつつも、それに同意している。同時に「私」は、虐政を行う軍政幹部を他者として非難するのではなく、自分を「戦っている日本人の一人」として、日本軍事体制の一部と認識している。さらに自分に感謝するインドネシア人に対して、「私」は自分が感謝に値しないと述べる。こうした姿勢は、「慈悲深き供与者」として常に感謝される日本人という先述のステレオタイプとは対極にある。林は、日本人が構築しようとしている「そうありたい」自己像を、冷ややかに突き放している。

一方で「私」が(そして林が)強い共感を抱いているのは、「狂人」高梨である。高梨はスドップ・マラム率いる抗日運動のグループと深い関係にあり、やがてそれに関連して憲兵隊に殺されたとの報を「私」はジョグジャカルタで受ける。「私」は彼の抗日運動の仲間から、遺品として懐中時計を手渡される。スドップ・マラムからのプレゼントであったその時計には「我が民族の屈辱の記念として」と刻まれており、「私」は言わば高梨が抱いたインドネシア民族運動への熱い思いを、形見として受け取ることになる。しかし高梨は実際には死んでおらず、憲兵隊に瀕死の重傷を負わされた後、回復して日本に連れ帰られていた。「私」は戦後シンガポールでの収容を経て帰国した後、ある名家主催のディナーで高梨と偶然再会する。この時高梨の消息を「私」に説明したG侯爵は、次のように語る。

「占領されたインドネシアが彼を狂気させ、占領された日本が彼の狂気を未だに治癒させない。

(中略) [インドネシアが独立をしようとしているため] スドップ・マラムの花の秘密結社も<sup>16</sup>、それぞれ本名にかえて政治の表面に現れているかもしれぬ。ただ、僕等がまだ彼等の本名を知らないだけだ。それを思えば、高梨の狂気も無意味ではなかったということになる」(212-213頁)

高梨を狂気に至らせたのは、インドネシアを支配した日本軍政の建前と現実の齟齬、そして日本人でありながらインドネシア民族運動に深い共感を持つという板挟みをもたらす葛藤である。日本軍政の矛盾を感じ取っていた「私」は、それを狂気に至るまで真摯に受け止めた高梨に共感し、敬意も抱いている。日本の軍事体制を他者化し非難の対象とするのではなく、自分をその一部と認めているために、葛藤はある。

ところがG侯爵は、高梨の葛藤の結果である狂気が、インドネシア民族運動が成就し独立を達成しようとしているために、「無意味ではなかった」と結論づける。このことは、日本人が受け止めるべき軍政の抑圧と虐政の重みが、独立の成就によって失われようとしていることを示唆している。G侯爵はまた、連合軍による占領期に日本人が感じた葛藤と、日本軍政がインドネシアにもたらしたそれとを、どちらも高梨を狂気せしめる要因として同質化している。これらの葛藤は全く性質が異なるはずであるが、日本人も占領下で葛藤し苦しんだとの認識が、日本人が記憶すべきインドネシア占領の実態と責任を忘却させていると暗示しているかのようである。もっとも「私」はG侯爵の説明に納得しておらず、その点に林がこの忘却に批判的であることも暗示されているのだが。

#### 4. 無実の私たち：山田光子『セレベスの挽歌：銃と女の記憶』

山田光子の『セレベスの挽歌：銃と女の記憶』(1961)は、日本占領期インドネシアを描く作品には非常に珍しい、女性作家による小説である。大正15年生まれの本筆者は日本軍政下のマカッサル研究所に勤務経験があり<sup>17</sup>、本作品は恐らく山田自身の経験に相当程度基づくと考えられる。

物語は、法医学者の娘である帆足真旗が、軍直属のマカッサル研究所・慣行調査部に赴任して過ごした二ヶ月弱の経験を描く。帆足は大学を卒業したばかりで、父の研究室で学生生活に入ることを望むが果たされず、軍属としてマカッサルに送られる。帆足は現地人助手の青年リリーの助けを得て調査を始めるが、戦局悪化に伴う治安の乱れを恐れる軍の実力者大門中尉の暴虐や現地在住日本人の非道に多く出会う。帆足は間もなくリリーが抗日運動の活動家であることを知るが、優秀で親切な彼を次第に愛するようになる。互いに愛情を告げ合った直後にリリーは帆足のもとを去り、間もなく日本兵に捕らえられ処刑される。

この作品を貫く主題は、タイトルにも現れているように、銃(=体制派軍人および資本家)と女(=繊細な犠牲者)の対比である。「銃」の側が全て日本人男性であるのに対し、「女」の側には日本人に夫を殺された現地人女性や日本兵に弄ばれる日本人慰安婦も含まれる。男性で「女」の味方または理解者となる者には、大門中尉に虐げられる非力な日本人の軍関係者もいるが、頼りになる「優しい」男性はリリーと華人の軍医師<sup>チヤ</sup>という非日本人のみである。ここには作者の、体制派または有力者の日本人男性に対する糾弾の意識が働いていると見る事が出来る。それにも関わらず、リリーも軍医師も日本語が極めて堪能で、さらにリリーは「日本人となんら変わらない顔つきをした長身の青年」で

ある。帆足は現地語を理解することになっているが、日本語を解さない現地人男性は理解不能と言わんばかりにその存在は薄い。

大門中尉は「銃」の象徴であり、その非道な暴虐ぶりはしばしば帆足の繊細な感性と対比されて描かれる。到着後間もない頃に起きた空襲で、帆足は大門中尉とともに防空壕への避難を余儀なくされる。

壕の入り口に、原住民の裸足の女が立つと、

「土民は、道路わきの壕をさがして入れ」と、アクの強い土地の言葉で、大門中尉がどなった。

「入れてあげたらいいのに」

「駄目だ。つけあがるから」

「私そんな中尉って嫌いよ」

彼女は正面から中尉をみやった。大門中尉の顔は、偏狭と頑固をもの語るように、狭い額に、まなじりのあがった、蛇のような細い目がはりついており、その目元から眉が額の中ほどまでいきおいよく一字にせりあがっていた。そしてその偏狭と頑固さは、あくまで上部の命令を守って下卒をひきいる不撓さを、への字に結んだ口角にみせていた。(中略)

防空壕は上下にはげしくゆらぐと、砂塵と熱風でみたされた。飛行機が遠ざかると、彼女は防空壕をはいでた。壕の入口に裸足の女が倒れていた。

「爆風でやられたんだな」

大門中尉はその原住民の女の生死を、足のつまさきでたしかめた。彼女はその動作を忌むように、中尉の側を離れると、ひとみをいっぱいひらいた。砂だらけの女の側にひざまずいた。怨色をうかべた女のひとみには、南国の星がうつっていた。そのまぶたをとじてやった彼女は、しばらくくらがりのその場にじっとしていた。(34-35頁)

男性性が強調される大門を、帆足は異様なほどの女性的言葉遣いで非難、攻撃する。しかし軍政有力者とこのように正面から対決することが果たして可能であったろうかと、そのリアリティには疑問が付されよう。さらにリアリティのないのは、尋常でなく落ち着いた帆足の態度である。彼女が防空壕に入れようと努めた女性が目前で死んだにも関わらず、大門に怒りを表すのみでショックもなければ自らの無力さに気落ちすることもない。帆足には法医学の知識と経験があり、死体への恐怖が弱いことを差し引いても、彼女には日本人の差別と狭量が現地の人に死をもたらした事実が受け止められていない。

本作品はほぼ全編、大門とその他体制派日本人男性の悪行を詳述していると言って過言ではない。その叙述は殺戮や性暴力に至るまで精緻を尽くしており、徹底して体制派日本人男性の非道暴虐を暴き糾弾することがこの小説の意図であると理解するのは容易である。しかしより興味深いのは、帆足が体制における自分の立場を説明する場面である。以下は大門と帆足の会話である。

「破天荒の民俗学者だね」

「もっとも——学者にはへボがつくんだわ。だって常人として、泣いたり、悲しんだりするほ

うが忙しいんですもの——」

「わめくようにいわなくなつていいだろう」

「私がわめくなんて——とんでもないわ。私なんか——わめいて、号令する力も、わめいて逆らう勇気もないのよ」(218頁)

帆足は自分に「号令する力」も「逆らう勇気もない」として、無力で体制に立ち向かえない自らの(そして作者の)立場を説明している。物語の中の帆足はリアリティに欠けるほど大門に立ち向かうのだが、作者は自分や読者に言い聞かせるように彼女の無力さを強調する。この小説に、自立した強い女性は帆足を除き一人も登場しない。女性は常に、体制派の日本軍人または資本家の犠牲者である。帆足はインドネシア人および日本人の犠牲者女性に深い同情と共感を示すことで、軍直属組織にいる彼女自身をも犠牲者の側に立たせている。「無力な女性」像の強調は、作者のジェンダー観の反映というよりも、自分を含む女性の犠牲者性を強く主張した結果である。

体制派を含む日本人との関係、そして現地人への思いに関しては、帆足はリリーに対して次のように語る。

「土人と教わってきたこの島に、狼煙〔引用者注：抗日運動家によって、仲間同士の合図および日本人に恐怖を与えるために上げられてきた〕がその人たちの手で打ち上げられるということにおどろいたことはほんとうでした。(中略)この二ヵ月近くの間、私は——身のまわりで起きた事件を通して、私の憎まねばならない相手が、愛国心をふりまわすごろつきのような一部の同胞だったと、知らされたんだわ。私は狼煙をにくみません。はっきりそのことはいえるの。そのかわり——私たちすべての邦人を憎んでもらいたくないの」

狼煙をたく抵抗組織の原住民の人を憎むことなどできぬ彼女だったが、さりとて内と外からせめられる同胞への愛も、断ちきることができないのが、彼女の本心だった。矛盾した異質にみえる、二つに引き裂かれたこの心は、いつかりリーのいった戦争という悪の原罪を、彼女が見いだした後々まで、彼女を身もだえさずに違いなかった。(230頁)

「愛国心をふりまわす」者は、それを口実に現地人や日本人部下を抑圧する大門とその取り巻きと理解出来る。それを「ごろつきのような一部の同胞」として自らと分け隔て、彼等に占領と抑圧の責任を負わせている。それ以外の同胞は「内と外からせめられる」犠牲者として彼女の愛の対象となり、それゆえ被支配者にも「憎んでもらいたくないの」と敵意の対象から外すよう求めることが出来る。現地の人々に対して帆足は、リリーと日本の軍人によって肉親を殺された女性を除けば、まともな関心を向けていない。抗日運動家と同胞との間で「二つに引き裂かれた」という帆足は、『水中の城』の高梨とは全く異質の場にいる。

「原罪」について、そして日本軍政地域にいる自分の立場について、帆足は次のように語っている。次の引用のうち前者は、シンガポールにおける日本兵による華人虐殺の報せを聞いた時の帆足とリリーの会話、後者は日本兵の監視のもとに雨宿りをしている捕虜(出身は不明)を見かけた後の帆足と車医師との会話である。

「ノナ〔引用者注：ミスにあたる敬称〕帆足、考えすぎですよ、貴女だけ苦しまなくていいんです」と、彼女の背をさすった。「それなら誰が苦しめばいいの」

「誰か背に原罪（Erbsünde）をくくりつけた奴がいるんだ。そいつらがしこたま苦しめばいいのに」（中略）それ〔原罪〕が、重々しい巨大な力で、人々をひきすえ、粉にする、大きな石のろく轆のように、彼女は思いこむのだった。ぐるで、それをまわす人にだけはなるまい、それだけのことで、若い彼女にはせいっぱいの努力がいると思った。（49頁）

やせほそり、怨色を浮かべた捕虜の目におびえた彼女は、顔を胸前におとしてだまっていた。その彼女に車〔医師〕は、（中略）「ノナ帆足、何をかんがえてるの」と、ふりむいて問うた。

「戦争っていやね。私、捕虜の人たちをみても、なんだかすまなくなってしまうの」

「ノナ帆足、あなたが戦争をおこしたんじゃないんだから。滅鬼積鬼にとりつかれなくていいんですよ」

と、車は彼女の感じやすい心を、やさしくなぐさめた。（68頁）

ここでは、「原罪」は戦争という悪であり、それを他人にくくりつける者だけが罪に値するとされる。帆足は「せいっぱいの努力」によって「原罪」を回す「ぐる」にならずに済むと信じている。「感じやすい」帆足は（そして作者は）、「苦しまなくていい」と免罪されることを求めている。この小説に繰り返される「無力な女性」像や女性の犠牲者性の強調は、この免罪の求めのためと言えよう。免罪するのは、日本人よりも外国人、そして特にリリーのよう民族運動に殉じる存在が選ばれた。「土人」に抵抗の意思と行動力があることに驚き、日本兵が酷使する捕虜に対しても「すまなくなってしまうの」という以上の感情も行動の意思も持たないにも関わらず、現地人からの免罪を求める作者を非難するのはたやすい。しかし敗戦後十年以上経ってこのような求めを書いているのは、作者が罪悪感を抱え続けていることを示しているのではないだろうか。

## おわりに

このように1945-70年の日本小説や軍関係者の出版物を検討することから、当時の日本人がインドネシア占領を回想しつつ、いかに自己像およびインドネシア人像を構築して来たかが確かめられる。福馬や林など非軍人による初期の小説は、民間日本人とインドネシア人の間に対等に近い、相互に影響を与え得る関係を描いている。それに対し軍関係者による回想は、日本人とインドネシア人を非対称に描く傾向が強い。「慈悲深き供与者と感謝溢れる受領者」のステレオタイプは、まさに戦後の日本人が構築した、占領期に「そうありたかった」自己像と「そうあってほしかった」インドネシア人像である。

しかし多くのインドネシア人が日本支配に苦しみ日本人を嫌悪した事実に対し、日本人はこの自己像を守らなければならなかった。そのために、「悪しき日本人」が他者化されて析出され、憲兵や軍上層部の悪のイメージが増幅された。「良き日本人」のイメージを元軍関係者が主張する時には、上層部を批判するとともに、中下士官によるインドネシア人と肩を組み同じ釜の飯を食う平等で人間味

ある付き合いが強調された。山田は「被害者」女性の国籍を越えた連帯感を示し、軍上層部ならびに日本人資本家男性の悪を強調した。山田が行った善悪日本人の区分や「犠牲者」である女性および一般日本人の免罪の訴えなどは、表現の稚拙さもあって彼女の小説において目立つものの、そうした傾向は程度の差こそあれ、他の多くの作品に共通している。

そのような傾向がどう生まれたのかまでを探求しているのが林である。林が暗示するように、インドネシアが独立を達成したこと、そして敗戦後の混乱や占領という日本人の辛苦が、戦後日本人の記憶に与えた影響は大きい。インドネシア独立が日本による占領に意義を与え、自身の辛苦が被害者としての記憶を培ったことが、日本のインドネシア軍政や当時の日本人のインドネシア観を、戦後日本人が批判的に見直す機会を失わせた。戦後日本人が作り出した自己像およびインドネシア人像は、そのようにして生まれた日本人の自己慰撫的な記憶の現れである。

福馬と林は、インドネシア人が日本人や日本軍政をどう認識していたかを、インドネシア人の言葉で語らせている。小説中の人物の言葉はもちろん作者の創作であるのだが、二人は語り手ごとの認識の差異や聞き手の反発も含めて、できる限り率直に表現しようと努めている。福馬はさらに自立し職業に誇りを持つインドネシア女性を描き、集団で残忍な行動を取るインドネシア人も見たままに描きつつ、何とか彼等を理解しようと努めた。こうした姿勢は、ステレオタイプを当てはめる傾向の強い軍関係者の著作と大きく異なる。

本稿が指摘したような、主に元軍関係者によって戦後間もない時期から構築されたステレオタイプやイメージは、その後の日本の大衆メディアに執拗に現れ、日本人の記憶に強い影響をもたらした。一方で福馬や林の1940年代の小説に見られた、日本人による悪行や率直な日本人-インドネシア人関係、自立したインドネシア女性像やインドネシア人の集団狂気はほとんど忘却された。そうした記憶のあり方を表す典型が、ほとんどこれまで述べたようなステレオタイプや常套イメージばかりで構成された、藤由紀夫監督映画『ムルデカ 17805』（東日本ハウス、2001）である。このような戦後日本人の記憶のあり方の原因には、日本人自身による選択的強調や忘却の他に、インドネシア人の手になる小説や映画が日本でほとんど普及していないことも挙げられよう。サイドが分析を試みたような、支配者と被支配者の視点が交錯する場合は、日本語圏にまだ現れていない。

## 付記

本稿作成にあたっては広島大学大学院文学研究科溝渕園子氏の助言を得た。記して謝意を表したい。

## 註

- <sup>1</sup> 占領地の記憶に関する近年のすぐれた研究に、マイク・モラスキー『占領の記憶／記憶の占領：戦後沖縄／日本とアメリカ』、青土社、2006がある。
- <sup>2</sup> 木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』、世界思想社、2004は昭和期の「南洋物」文学を扱った最も広範で本格的な研究であるが、戦後日本人の占領期インドネシアに関する記憶は、主要な考察対象となっていない。
- <sup>3</sup> E. W. サイド『文化と帝国主義』、みすず書房、1998-2001。
- <sup>4</sup> 日本におけるこのアプローチによる代表的な研究に、芦谷信和・上田博・木村一信編『作家のアジア体験—近代日本文学の陰画—』、世界思想社、1992、川村湊『南洋・樺太の日本文学』、勁草書房、1994、木村一信前掲書ならびに『南方徴用作家—戦争と文学—』、世界思想社、1996、浦田義和『占領と文学』、法政大学出版局、2007がある。

- <sup>5</sup> インドネシア文学における日本認識を検討した研究に、プラムディヤ・アナンタトゥールの『日本軍占領下の少女たち』を分析した William Bradley Horton, "Pramoedya and the Comfort Women of Buru: A Textual Analysis of *Perawan Remaja dalam Cengkeraman Militer* (Teenage Virgins in the Grasp of the Military)," 『アジア太平洋討究』 14 (2010) : 71-88 がある。
- <sup>6</sup> ベネディクト・アンダーソン『増補版 想像の共同体』, NTT 出版, 2006, 50-59 頁。
- <sup>7</sup> 作品の選出には、インドネシア日本占領期史料フォーラム編『インドネシア日本占領期文献目録』, 龍溪書舎, 1996 を利用した。
- <sup>8</sup> 福馬謙三『黒い情熱』, 日京書院, 1948; 林房雄『水中の城』, 大日本雄弁会講談社, 1949; 山田光子『セレベスの挽歌: 銃と女の記憶』, 東京信友社, 1961。山田がどの程度職業作家として文筆業に専念していたかは、あまり明らかでない。
- <sup>9</sup> Ota Atsushi, "Japanese Memory of the Wartime Occupation of Indonesia," in Peter Post, William H. Frederick, Iris Heidebrink and Shigeru Sato (eds.), *The Encyclopedia of Indonesia in the Pacific War* (Leiden and Boston: Brill, 2010), pp. 421-428.
- <sup>10</sup> 今村均『今村均大将回想録第四巻 戦い終わる』, 自由アジア社, 1960。
- <sup>11</sup> 茨木誠一『メラティの花のごとく: インドネシア独立にささげた日本人の血』, 毎日新聞社, 1953。
- <sup>12</sup> 田中正明『アジア風雲録』, 東京ライフ社, 1956; 越野菊雄『独立と革命—若きインドネシア—』, インドネシア経済研究所, 1958。田中は南京事件の責任を問われた中支那方面軍司令官松井岩根の元私設秘書であり、越野は海軍司政官としてアンボン、バリなどに駐在した。
- <sup>13</sup> この宣伝班には、阿部知二、大宅壮一、大木惇夫、武田麟太郎、横山隆一などの文学者や芸術家が徴用され参加していた。町田敬二『戦う文化部隊』, 原書房, 1967。
- <sup>14</sup> サイドは例えば E. M. フォースターの『インドへの道』の分析を通じて、支配者による被支配者に対する理解の不可能性について論じる。サイド『文化と帝国主義』, 第二巻, 18-29 頁。
- <sup>15</sup> 木村一信『昭和作家の〈南洋行〉』。
- <sup>16</sup> スドップ・マラムは本来花の名で、夜来香を指す。
- <sup>17</sup> 本書奥書の情報。勤務内容は不明。